

李賀「蘇小小歌」について

(一)

李賀の詩は「鬼仙之詞」(宋 嚴羽『滄浪詩話』)と呼ばれるが、そう評價される彼の詩の中でも「蘇小小歌」はとりわけ妖しい輝きを放つ詩であるといえるだろう。吉川幸次郎『中國文學史』第一章にいう。

……この國にあつては中庸、つまりバランスということが最高の倫理であり、何事によらず一方的に偏したものはいけないという考えが強かったのである。従つて過度に抒情的なものが發生しても人々はつねにそれに危惧を感じた。唐の詩人に李賀(長吉)という人がある。その人の詩に「蘇小小墓」(蘇小小の墓)というのがある。

李賀「蘇小小歌」について(山崎)

山 崎 みどり

幽蘭露	幽蘭の露は
如啼眼	啼ける眼の如し
無物結同心	物の同心を結ぶ無く
煙花不堪剪	煙花は剪るに堪えず
草如茵	草は茵の如く
松如蓋	松は蓋の如し
風爲裳	風は裳と爲り
水爲珮	水は珮と爲る
油壁車	油壁の車して
久相待	久しく相い待つ
冷翠燭	冷やかなる翠燭
勞光彩	光彩を勞す
西陵下	西陵の下
風雨晦	風雨晦し

この詩は今日のわれわれが考えやすい詩の平均と非常に近いように思われる。しかし中國自體の批評は、この詩をかならずしも最高の詩とは考えない。それはこの詩が美的感動のみを目ざして、倫理的な感動に缺けるからである。

倫理的な感動に缺けるのみならず「みな天亡の微なり」と李賀詩を批評するのは、清の潘德輿『養一齋詩話』巻五である。だが、吉川幸次郎が否定的にはあるが示すように「蘇小小墓（歌）」は、美的感動を我々に與える。

しかし、はたしてその美しさは、單なる表面的な字句上のものにすぎないのだろうか。李賀詩は、一面的には割り切れない複雑さを持っているが、この詩もまた讀む角度によってその色を變化させていくような重層性を實はもっている。そのような幾重もの要素が自然に融合されているところが、この詩の大きな魅力となっているのではないだろうか。本稿では、この詩の特に問題となる個所を取りあげて考察しつつ、「蘇小小歌」の美しさの秘密の一端を解き明してみたい。

(一)

本稿では、この詩の題を宋本⁽²⁾によって「蘇小小歌」とした

が、『全唐詩』は「蘇小小墓」に作り題下に「一作歌」と注記している。歌全體は墓地における情景を詠んだものとみてさしつかえないだろう。詩は李賀本集のほか『樂府詩集』八五、雜歌謠辭にみえる。『樂府詩集』は、古い時代の無名氏の作として次の「蘇小小歌」の古辭を載せている。

我乘油壁車 我は乗る 油壁車
郎乘青驄馬 郎は乗る 青驄馬
何處結同心 何れの處にか同心を結ばん
西陵松柏下 西陵 松柏の下

李賀の詩がこの古辭にもとづくものであることは語句の一致からも明らかであるが、錢塘（浙江省杭州市）の名娼と傳えられる蘇小小については後記する。まず、詩の中でも特に解釋のむずかしい前半部分について考えてみたい。

- 1 幽蘭露
 - 2 如啼眼
 - 3 無物結同心
 - 4 煙花不堪剪
- （上聲一五潛）
（上聲一六銑）

「幽蘭露」は奥ゆかしくけだかい蘭の花におく露。蘭は

「秋蘭」であればキク科の香草「ふじばかま」を指し、蘭科の春蘭ではない。後述するように李賀は他の墓地の詩を秋の季節で詠んでいるので、この詩も秋の詩である可能性が大きい。断定はできないが、おそらく「秋蘭」をいうのではないかと思われる。いずれにしろ、蘭という語には李賀の愛讀した『楚辭』にみえる高潔なイメージが投影しているだろう。

「幽蘭の露」は即ち蘇小小の涙でもあり、香り高い蘭の花にも似た女性が、ほろほろと涙を流す姿を浮びあがらせる。この二句は、露をおく蘭の花が咲く墓地の情景であって、彼女の面影であり、しかも彼女の心の思いでもある。景物を述べるのみの短い二句で、これだけのことをいづくす手法は見事である。三、四句は難解で、その解釋もわかれる。

死後一切都消滅了、更沒有東西可以綰結同心。墳上脆薄如烟的幽花也不堪剪來相贈。

葉葱奇『李賀詩集』（人民文學出版社、一九五九年）

この蘭はなにかと同心結びをしたくおもうているらしいが、結ぶべきあいての品物がな、煙をおびた他の草花は

李賀「蘇小小歌」について（山崎）

きるねうちがない。

鈴木虎雄『李長吉歌詩集』（岩波文庫、一九六一年）

幽蘭煙花もまた同心を結ぶべき物ではない。死んだ蘇小小の體も死にきれずにさまよう魂魄もがそうであるように。（……中略……）醒めた理性は、女を夢中にさせて逃げた男がかれを待つ女のもとに金輪際歸って来ないことを知りつくしている。にもかかわらず、醒めた理性なんぞの忠告に耳を傾けかねる願いが、萬に一つもありえぬかれのやつて来る時を待ち、かれの來ぬのが天命ならば、むごい天にさからってその理不盡な命を功無きものにさせようとまでに物狂おしい彼女の戀ごころには、ふがない、つれない、男ではあっても、そのゆかりの花を剪るには忍びぬのである。

原田憲雄「蘇小小」『李賀研究』第十三號（方向社、一九七五年）

第三句の「結同心」は心を合わせること、男女が契りを結ぶこと。第四句の「煙花」については、「けむりをおびた他の草の花」（鈴木虎雄）、「夕もやの中の花。煙はもや。」（荒井

健『李賀』(岩波書店、一九五六年)、「春がすむ花、野山の風情をしめす。それは絹のように見えるが、剪んで贈り物にはできない。」(齋藤响『李賀』(集英社、一九六七年)、さらには佐藤春夫の譯を引いて「煙花」は妓女をさす隠語であるとするもの(横山伊勢雄『唐詩の鑑賞——珠玉の百首選』(ぎょうせい、一九七八年)など、さまざまである。

「煙花」が妓女を指す用法であるという説については、第三章で再度考察する。齋藤响注の「春がすむ花」は、普通の「煙花」の用法、例えば「煙花三月下揚州」(李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」)を意識したものだろう。原田憲雄はこの注について、李賀が「煙」字を使うばあい、春だけでなく秋と結ぶことが多いので、「蘇小小歌」の煙花を「春がすむ花」とするのは問題であるとする。だが、「煙花」の使用例の問題以前に、「春がすむ花」は詩全體の情緒にそぐわない。また李賀はこのような墓地の情景を詠む時、他の二首はどちらも秋の情景として詠んでいる。それらを考えあわせるなら、いずれにしろ「春がすむ花」とするには無理があるように思う。

(三)

詩題になっている蘇小小という女性は、どういう人物であ

ったのだろうか。「蘇小小」という語の持つイメージと關わるだけに、その経歴、人物像は問題になってくるだろう。彼女に關しては、五世紀末頃南齊時代に錢塘にいた名妓という以外に從來の諸家の註は何も觸れない。ただ、清の王琦は『李長吉歌詩彙解』の注に、蘇小小的墓について次のような資料を引用する。

①蘇小小墓在嘉興縣西南六十步。乃晉之歌妓。今有片石在通廳、題曰蘇小小墓。

『方輿勝覽』

②嘉興縣前有吳妓人蘇小小墓。風前之夕、或聞其上有歌吹之音。

李紳「眞娘墓詩序」

①は蘇小小を晉の歌妓とし、②は吳の人とするように時代は異なるが、そのいずれも蘇小小的墓を嘉興にあるとする。古辭と李賀の詩にみえる西陵は杭州にあるが、嘉興はその東北約九〇キロメートルである。李賀は詩中に西陵と詠むのだが、その詩と李紳のいう「風前之夕、或聞其上有歌吹之音」

とは内容が非常に似通っている。李賀が、この傳説を知っていた可能性は大きい。李紳は、蘇小小の居住した土地に近い無錫（江蘇省無錫）の人である。また、李賀と同時代の人（七七二―八四六）である上に、李賀の友人でもあった沈亞之がその傳「李紳傳」（『沈下賢文集』卷四）を書いている。

李紳を通じて蘇小小に關するなんらかの知識を得た事も考えられるのだが、李賀自身が蘇小小の墓を訪れた可能性はないだろうか。この問題に關して齊藤昶『李賀』等は、いわゆる寄題であるとする立場をとっている。

しかし、この件については朱自清がその『李賀年譜』（龍門書店、一九七〇年）の中に次のように論證しているように、李賀は南方の地を遊歴していたと考えるのが妥當であると思われる。朱自清の記す論據を要約すれば次の二點である。

①李賀の十四兄は、李賀の「潞州張大宅病酒。遇江使、寄上十四兄」の詩にみえるように、昭關（安徽省和州含山縣小峴の西）に居住している。同詩中に「覺騎燕地馬、夢載楚溪船。椒桂傾長席、鱸魴斫玳筵」というのは、昔その地を訪れた時が忘れ難いのである。

李賀「蘇小小歌」について（山崎）

②李賀の集中には樂府題を用いたものもあるが南方の風土を詠んだ詩が大變に多い。例えば「追和柳惲」「大堤曲」「蜀國絃」「蘇小小墓」「湘妃」「黃頭郎」「湘中曲」「羅浮山父與葛篇」「畫雨東城」「釣魚詩」「安樂宮」「石城曉」「江南弄」「貝宮夫人」「江樓曲」「莫愁曲」等。「七夕」詩の最後に「錢塘蘇小小 更值一年秋」という句があり、注釋者達はなぜ突然「蘇小小」の名が出てくるのか不明としているが、彼が江南の地を訪ねたということを考えるなら納得できることである。

李賀が蘇小小について李紳から知識を得たのか、以前から何らかの理由で知っていたのか、それとも南方の地を訪ねて初めて知ったものなのか、そのいずれであるかは確認のしようがない。ただ李賀が南方の地を訪れたことはほぼ確實であり、またこの時代にすでに「風前之夕、或聞其上有歌吹之音」という傳説が作られていたことは李紳の詩の序文からはつきりとしている。李賀以前の詩に蘇小小の名は管見の限りでは見當たらず、彼女の名は李賀詩によって有名になったもののなかもしれない。また李賀は古辭に基づいて「西陵」という地名を用いただけであるかもしれないが、古辭は西陵を

墓とはっきり示しているわけではない。おそらく文獻上に「蘇小小墓」と記されている嘉興の墓が本来の墓ではないかと思われる。蘇小小の事跡には、墓地の所在のみならず不明瞭な部分が多い。これは、おそらく「蘇小小」という名が一種の普通名詞（源氏名）のようになってしまっていたことも関係があるのだろう。例えば、墓の所在以外にも、明、郎瑛『七修類稿』卷二七には蘇小小が二人いたと記されている。それによれば、一人は南齊の人であり（典據『樂府詩集』樂府解題）、あと一人は宋人（『武林紀事』）である。

また、李賀詩以降は数多くの蘇小小を詠む歌が作られている。吳正子・劉辰翁『李長吉歌詩』（昌平叢書）に「劉次莊云、小小非唐人、世見樂天、（劉）夢得多題詠、遂云與之同時、予謂劉說贅矣、梁武帝已作小小歌、又何疑哉」と、蘇小小を唐人が多く詠むので彼女も唐人であると誤解されているという意見が出されるほどであった。『樂府詩集』にも、唐の溫庭筠や張祐の「蘇小小歌」を載せている。だが、以上の蘇小小関係の資料に、直接李賀の詠む蘇小小に結びつくようなものはみあたらない。

注釋書類では、現代のものであるが、傳經順主編『李賀詩歌賞析集』（巴蜀出版社 一九八八年）に、傅秋爽がその注解の

中に次のような傳説を記載する。

传说、苏小小病体沉重、临终之季、人间她有什么话留给那些日常交往的人、她答道：“交、乃浮云也、情、犹流水也；隨有隨无、忽生忽灭、有何不了、致意于谁？”

この話からは、自らの境遇に一種の諦念を持った蘇小小の姿が浮びあがるのだが、古辭との結びつきについては特に述べられていない。古辭と關連のある傳説としては、民間の傳説を收集整理した冊子、陳德來編『历代名女传说』（袁克露・陶淇搜集整理）（山西人民出版社、一九八三年）に次のような話がみえるので要約する。

蘇小小は錢塘で客の絶える間がないほどの名妓であつたが心は晴れなかつた。ある時、彼女は張生という書生と知りあい、彼に自分の身の上話をする。それによると蘇小小は姑蘇の人で、その夫は副將軍であつたが戦いに破れ首を斬られた。夫の罪がその母と自分にまで及びそうになつたので彼女は錢塘の親戚のもとに身を隠そうと逃げ出した。だが親戚には逢えず、姑は病に倒れ路銀を使い果たして宿

を追いついてしまふ。その時、たまたまその宿にいた許妈妈という女性に世話をしてもらい、やむをえず娼妓となつた、というのである。蘇小小は、都へ行って役人になりたいがその旅費もないという貧しい張生に自分が貯えたお金を渡す。彼はやがて望みどおりに役人となつて赴任地へ蘇小小を伴うために戻ってくる。彼女は喜びのあまり泣きながら「妾乗油壁車、郎御青驄馬、何處結同心 西陵松柏下」という歌を唱う。

ところで、蘇小小は妓女でこそあつたが、常日頃身を清らかに保つていた。蘇小小を我が物にしたいと考えていた多くの公子達は、張生の話を聞いて嫉妬心を燃し、張生と蘇小小に關する惡い噂を共謀して流した。張生は蘇小小の渡した金を賄賂に使つてその地位を得た等々というものであつた。その陰謀のために張生の地位が危うくなるのを感じた蘇小小は夜中に首を括つて自ら命を斷つ。張生は彼女の墓を西湖畔に作り墓前に松柏を植えた。その後、多くの詩人がこの墓を訪れて彼女を詠む詩を残している。

〔錢塘遇知〕

この悲劇の傳説は以上のようなものである。この中では、

李賀「蘇小小歌」について（山崎）

蘇小小はもと軍人の妻で、夫の母親に孝行するためにやむを得ず妓女となつたこと、そのような境遇ではあつても身を清く保つていたということ、また彼女の戀人となつた張生も最後まで彼女を裏切らなかつたということ等が話の要點となるだろう。この冊子には、もう一篇「蘇小小駕湖品画」（陳宜中搜集整理）という傳説を載せるが、その話の中の蘇小小も同様に非常に誇り高く機智に富んだ女性として描かれている。

以上の二つの傳説が、どういふ狀況で收集され整理されたかその事情は不明である。この傳説が、いつ頃からどの程度一般に知られていたものなのかわからない。ただ、今に傳わる「蘇小小」という女性のイメージについては、大變に頭の良い毅然とした女性として定着していることは確認できる。以上に掲げた傳説が狭い地域でのみ知られたものであつたにしても、この地方を訪れた形迹のみえる李賀がその時にこのような傳説を知つた可能性は考え得る。蘇小小は妓女ではあるが詩句にあらわれる蘭の花が古來高潔なイメージを持つものであることを考えると、李賀の持つた蘇小小のイメージも、むしろこの傳説の傳えるイメージに近いものであつたのではなからうか。

また、李賀は自分の戀人のことを蘇小小に託して詠んでい

るのではないかという説がある。陳式如は「姚文燮昌谷集註」の中で、「賀必有所厚平康之妓而夭其年者、故托小小以傷之。」という。李賀には、もう一首蘇小小の名を詠む詩がある。「七夕」がそれであるが、その詩の最後にも「錢塘蘇小小 更值一年秋」という。この「蘇小小」について葉葱奇は『李賀詩集』（人民文學出版社、一九五九年）「惱公」詩の注釋において次のように述べる。「拿『王時應七夕』一句和卷一裏『七夕』一篇參互印證賀、和此女的定情、確實是在七夕、而『七夕』詩裏所謂『錢塘蘇小小』也正指此人。『王時應七夕』というのは、『王時應七夕、夫位在三宮』（次に逢うのは七夕の日、我が君は身分が高くなる相をもっていられしやる）という「惱公」詩の一句を指す。この「蘇小小歌」の持つ他の李賀の墓地の詩とはやや趣を異にする浪漫的な情緒には、確かにそのような想像を許すものがあるように思われる。

李賀詩の蘇小小は、以上を考えると男に捨てられた哀れな妓女の幽霊ではないようだ。むしろ、李賀が失った戀人を自分の詩の世界に甦えらせたものと解した方がよいのではなからうか。

(三)

「蘇小小歌」が一見單純にみえるが實は内容構成上、古辭や傳説類、そしてあるいは彼の實體験をも融合して詠まれたものであることを見てきたが、さらにもう一つ李賀が意識したと思われる典據がある。「蘇小小歌」についての批評として葉葱奇は次のようにいう。

宋宋祁說賀是鬼才宋嚴羽說賀是『鬼仙之詞』、就是對這一類作品而言、其實這還是從『楚辭』『九歌』中「山鬼」等篇得來、不過他的筆調特別幽冷、寒峭而已。

李賀と『楚辭』との關係については、既に杜牧が李賀詩集の序文に「蓋騷之苗裔。理雖不及、辭或過之。」と記してよく知られている。李賀自身もその詩の中で「楚辭繫肘後」（贈陳商）と述べている。この詩について葉葱奇と同様の評の最も早い時期に見られるものは吳正子箋註『唐李長吉歌詩』であろう。「西陵語、括山鬼更佳」というのがそれである。他にも陳本禮箋註『唐李賀協律鉤元』には「眞陳王之洛神、屈子之山鬼也」という。現代の『唐詩鑑賞辭典』（張燕

瑾執筆）（上海辭書出版社、一九八三年）では、さらに具體的に兩者を比較して、まず蘇小小の姿形については、「山鬼」の「被薜荔兮帶女夢」「既含睇兮又宜笑」の影響があるという。また「无物結同心、烟花不堪剪」の堅貞而幽怨的情怀、同山鬼「折芳馨兮遺所思」、「思公子兮徒离忧」的心境有一脉神传；西陵下风雨翠烛的境界、与山鬼期待所思而不遇时「雷填填兮雨冥冥」「風飒飒兮木蕭蕭」的景象同样凄冷。」と二つの詩を關連づけている。

さらにつけ加えるならば、「山鬼」というのは、いうまでもなく南方の美しい女神のことであり、その内容は人間の男性との遂げられなかった戀の悲しみを歌うものである。また、「折芳馨兮遺所思」と花枝を戀人に贈るのは、楚辭文學の一つの特色とされており、李賀詩も當然そのことを意識していたと考えられる。従って第二章に掲げた、「烟花」を妓女の隱語と考え、剪るという語を落籍させて自分のものとするという意に解する説には賛成できない。

(四)

以上で、詩句の解釋、構成上の主要な問題點に關しては整理し終えた。最後に「蘇小小歌」が詩史上どのような意味を

李賀「蘇小小歌」について（山崎）

持っているのか、またその主題は何なのかについてまとめてみたい。

李賀には、「蘇小小歌」のほかにも、墓地を題材とした詩がみえる。「感諷」五首其三や「秋來」である。もちろん鬼詩ともいわれる李賀詩の中には、鬼をその素材とした作品は他にも多いのだが、墓地に限定するというならばこの三首があげられるだろう。

従来、墓地というのは詩に詠むにふさわしい題材ではなかった。後漢の時代の作として推定される「薨里曲」（『樂府詩集』卷二七）は、墓地を詠むものとも早い時期の作と考えられるが、それは次のようなものである。

薨里誰家地

薨里は誰が家の地ぞ

聚歛魂魄無賢愚

魂魄を聚歛して賢愚無し

鬼伯一何相催促

鬼伯一に何ぞ相催促する

人命不得少踟躕

人命に少しも踟躕するを得ず

「薨里」は、泰山（山東省）の南にある地名で、黄泉の世界への入り口とされていたところである。しかし、この詩は人の命のはかなさをうたう送葬の歌であって、墓地の情景や雰

圍氣をうたうものとはいえない。『文選』卷二八にも、繆熙伯、陸士衡、陶淵明の挽歌詩が收められているが、それらの詩も「藁里曲」の系統を引くものといってよい。李賀がその「秋來」の詩に引く鮑照の「代藁里行」「代葬歌」も同様である。死者の立場に身をおいて嘆いたり、「形容稍歇滅、齒髮行當墮」とその身が醜惡に滅びていくさまを歌うことも一つのパターンとなっているようだ。それらは死を忌み嫌い恐怖する心から生み出されてきた詩の世界といってよい。李賀の墓地の詩のもつ、読む者を誘いこむような妖しい美しさをもつものとは全く別種の詩であるといわねばならない。

このような「死の世界」を詠む李賀に對して次のような批評がある。

李賀の二十七年の短い生涯を貫いたものは、病弱の彼に絶えずおそいかかった死への恐れであり、…(中略)…生涯を、この流れのなかに浮かべ、そして終えていった李賀は、あらゆるものを、「死」へと導かれる一本の絲の上において捉えた。

(上尾龍介「全唐詩にあらわれたる『死』字と李賀詩」東方學 第三十五輯 一九六八年)

もちろん彼に死への恐怖が全くなかったとは決していえない。そのうえに彼は二十七歳という若さで死んだ詩人である。當然彼の思想や人生觀も充分に成熟していたとはいえないだろう。それが李賀の詩の中にさまざまな矛盾が表れる一つの要因と考えられる。だが恐怖感や嫌惡感だけでは「蘇小小歌」等の墓地の詩が持つ特異な美しさは説明できない。彼は「感諷」の詩の中では死への道程を象徴的、幻想的に詠み、「秋來」の詩では過去のすぐれた詩人の亡靈を「雨冷香魂弔書客」と自らを慰めるものとして甦えらせている。⁹「蘇小小歌」でも、この世のものではない女性への嫌惡やそれとの對立は感じられず、美しい比喩は心地良いリズムを作っている。原田憲雄は、この詩のテーマを「死への反抗」としているが、李賀にとっては、死は恐怖や抵抗の對象というよりも、むしろもっと身近な親しいものではなかったのか。死は人生の終局に過ぎないのではなく、生をより深く豊かなものとする根源的な經驗の一つとしてとらえることができる。死を視界にいれることは、¹⁰生の世界を一層擴充させることでもあるだろう。それが、パターン化されたそれまでの挽歌と彼の墓地の詩を全く別種のものとした最大の要因ではないだろうか。そして李賀は、墓地の情景や雰圍氣に一種の美を發見

し、詩の題材として取りあげた最初の詩人であったといつてよいだろう。

(注)

- (1) 吉川幸次郎述・黒川洋一編『中國文學史』（岩波書店、一九七五年）
- (2) 「蘇小小歌」に作るの、以下の諸本である。北宋本『李賀歌詩編』（一九七一年影印、臺灣國立圖書館）、宋本『李長吉文集』（一九六七年影印、臺灣學生書局）、『李長吉集』（朝鮮活字本）、『樂府詩集』『李賀歌詩編』（四部叢刊本）
- (3) 「楚辭繫肘後」（贈陳商）『李賀歌詩編』卷三）
- (4) 「しかし實際にそこを尋ねての作ではなく、いわゆる寄題で、想像による作である。それには南齊のころの雜歌謠辭にある蘇小小歌にもとづいている」（『李賀』集英社、一九七七年）
- (5) 梁の武帝作の「蘇小小歌」は見當たらぬ。『樂府詩集』の「蘇小小歌」の項の次に、梁武帝の「河中之水歌」を載せるので、あるいは、それとの混同かもしれない。
- (6) 『三家評注李長吉歌詩』（中華書局、一九六二年）
- (7) 藤野岩友『楚辭』（集英社、一九七八年）の「山鬼」の「遺所思」の注に次のようにいう。「戀人に贈る。草木の花枝を戀人に贈るのは、詩經（鄭風、溱洧の芍藥）にも見えるが、楚辭では文學としての一つの特色とせられている。」

李賀「蘇小小歌」について（山崎）

(8) 李賀詩がなぜ鬼詩と呼ばれるかについての考察及び鬼詩の分類については、和田利男「李賀の鬼詩とその形成」（『群馬大學紀要人文科學篇』第五卷、一九五六年）。ただし、墓地の詩としての分類はされていない。

(9) 彼が單なる絶望的な悲哀の詩人でなかったことは、たとえば荒井健『李賀』（岩波書店、一九五九年）の「雁門太守行」の評にも指摘されている。「ここに形象化された息もつまるばかりの緊迫感、目もくらむばかりの光彩と色彩は、うちにひそむ作家の精神の異常な強烈さ——抑壓・凝縮させられて、しかもはがねのように堅固な生命力——を豫想させずにはおかぬ。」

(10) 「香魂」について、荒井健注は、「香ぐわしい魂。女の人の魂をさす」とするが賛成できない。

(11) 李賀は、「贈陳商」に「楞伽堆案前」と記すように、楞伽經を愛讀していた。楞伽經の宗旨は、この世にあると思われるすべてのものは、じつは自分の心が投影されたものにほかならず「對象の認識ということが結局はみずから心に現わし出した對象を見ることであると覺ること」（以下楞伽經については、高崎直道『楞伽經』（大藏出版社、一九八五年）の記述による。）というものである。李賀の生と死を對等のものとして觀照する態度に、この楞伽經が大きな影響を与えたのではないかということの一つの假説として記しておくたい。例えば、楞伽經の一節に次のようにいう。「生死は幻夢

の如し。」「工幻師の、草木瓦石に依りて種々の幻を作り、一切衆生の若干の形色を起し、種々の妄想を起すも、彼の諸妄想を起すも、彼の諸妄想も亦た、眞實無きが如し」(幻術師が、草木瓦石などから、人やその他の像をあらわす。人々はその虚妄な幻を分別して實際のものと間違えたりもろもろの欲求を起したりするが、その本性のものは存在しない。)